

論文審査の要旨

筆頭著者（学位申請者）氏名

小徳 のぞみ

主論文の題目

および

掲載誌・審査委員名

題目 The Impact of In-stent Restenosis Detected upon Routine Follow-up Angiography after Percutaneous Coronary Intervention with Metallic Stent (金属ステントを使用した経皮的冠動脈形成術後の追跡冠動脈造影において検出されたステント内再狭窄の影響)

掲載誌 Journal of St.Marianna University 2019;9:53-62

主査 小林 泰之

副査 松本 直樹

副査 宮入 剛

[論文の要旨・価値] 緒言：経皮的冠動脈形成術 (percutaneous coronary intervention: PCI) 後の冠動脈追跡造影 (routine follow-up coronary angiography: RFU-CAG) で検出されるステント内再狭窄 (in-stent restenosis: ISR) の予後に与える影響は、いまだ明らかとなっていない。申請者は、RFU-CAG で ISR を認めた患者と、ISR を認めなかった患者の臨床転帰を比較した。方法・対象：PCI を施行し金属ステント留置に成功した患者で、RFU-CAG を行った患者を対象として、RFU-CAG の結果より ISR 群と非 ISR 群の 2 群に分けて臨床転機を比較を行った。主要評価項目は、全死亡、非致死性心筋梗塞、脳血管障害、新規病変に対する血行再建術および心不全入院の複合イベントで定義される、主要心血管イベント (Major adverse cardiac event: MACE) とした。結果：2006 年 3 月から 2014 年 12 月までの期間に PCI を施行した患者 917 人のうち、824 人が対象基準を満たし、RFU-CAG の結果より ISR 群 (n=112) と非 ISR 群 (n=712) に分けられ、患者追跡期間中央値は RFU-CAG 施行後 1323 日間であった。非 ISR 群に比較して、ISR 群では ACS、緊急 PCI、BMS (bare metal stent: BMS) の使用、小さなステント径が有意に多かった。主要評価項目である MACE の割合は、非 ISR 群と比較して ISR 群で有意に高い結果となった ($p < 0.01$)。副次評価項目として、MACE の各項目を評価すると、ISR 群は全死亡 (16.1% vs. 6.2%; $p < 0.01$) および、新規病変に対する血行再建術 (28.6% vs. 16.2%; $p < 0.01$) の発生率が特に高かった。また、RFU-CAG で検出される ISR は、MACE の独立予測因子の一つであった。本研究は、RFU-CAG における ISR の臨床的意義を検討しており、臨床的価値が高く発信性の高い優れた論文であると判断した。

[審査概要] 学位審査は、平成 31 年 1 月 28 日に主査・副査及び数名の陪席者を伴って、申請者の約 30 分間のプレゼンテーションの後に、審査員から研究目的、研究方法の詳細、結果の解釈、考察の妥当性、研究の臨床的意義や将来展望に関して約 30 分間の質疑応答を行った。申請者はこれらの質問に対して懇切丁寧かつ的確に回答し、当該研究領域に関して深い知識を持ち、さらなる研究に対する意欲が感じられた。審査では、常に真摯な態度で礼儀正しく、申請者は学位授与に値すると判断した。

最終試験結果の要旨

[研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価] 研究発表と質疑応答から、申請者は当該研究領域に関する深い専門知識を有しており、十分な研究能力を有すると判断した。語学力に関しては、参考文献の中から和訳をしてもらって評価したが十分な能力があると判断した。